

Midnight Press WEB

q u a r t e r l y

No.6 2013 June

<http://www.midnightpress.co.jp>

email : mpweb2012@gmail.com

CONTENTS

詩 栗原知子

midnight critic

井上智洋「なぜ我々は有用性を測られる存在なのか？」

midnight summer poem collection

「夏の詩 十一篇」

詩人の肖像

渡辺はじめ「鶯巣繁男の詩」

midnight gallery

小林レント+古沢健太郎「召集」

連載 浅野言朗 中村剛彦 「そよ風」

「詩の教室」開講のお知らせ

自意識果樹王と太陽いつぱいの国

栗原知子

王様は二頭身で、赤いびろうどのマントを着ていました。

その国は果物の国で、お城からは綿々と連なる果樹園が見渡せた。晴れて気分の良い日の王様は、バルコニーで顎ひげをなでながら目を細めるのでした。

「……わしの沃土！」

ふむふむ、ふむふむ。

王様の仕事は

新しいフルーツパフェを考案する仕事

この国でそれをするのは王様だけだし

それをするから王様なのか

王様だからそれをするのか

どっちがどうかみんな忘れてしまったし

意外と どうでもよかった (合唱)

果物によって、果物のために、果物がてら日々を送っている王様！

Q. 王様の一日はどんなふうですか？

A. 答ええます。

七時 目覚めのレモネード

八時 朝食、歯磨き

九時 前夜寝床で考案したパフェのレシピを厨房へ伝達

(ラズベリーソースにカシスのソルベとミルクのアイスを塔のように重ね、キャラメリゼしたブリュレの天辺にクリームと砕いたピスタチオを添えて)

十時 おやつ、散歩

十二時 昼食、歯磨き

十三時 「国民の声」が届く

「バーニヤカウダーなう（画像）」

「プロのお掃除 エアコン・換気扇・浴室クリーニング一割引キャンペーン中」

「D―五十二地区 広場入口 空間線量（地上一メートル） 毎時〇・二マイクロシーベルト」

「迷い犬探しています（画像）」

「生まれてこなければよかった」

十四時 王様はバランスボールに乗って、大きな知恵の輪を触っています。カチャカチャ。カチャカチャ。カチャカチャ。

パフェがパフェ自ら求める、真の新しさとは！

絶望の闇に最初の鈍色（にびいろ）を差し入れる一匙とは！

時代に耐えうるパフェ！

いや、パフェに何ができる！

糖質め、脂質め、

ごまかしだ！

希望など！

ゼイ、ハア！

十五時 おやつ

十六時 テレビ

十八時 夕食、歯磨き

十九時 天蓋付きのベッドに入り、仕事

（大きくすくったバナライスの周囲にソーダとクラッシュしたゼリーを海のように湛え、数種のフルーツの砂糖漬けで涼しげに飾った初夏のパフェ）

「わしは今どこかで眠っていてさ」ときどき王様は、バルコニーで頬杖をついて考えます。「もしも夢から覚めたら、この世界の何から何まで、ぱちんとはじけて消えてしまふんじゃないかな」

王様は右手と左手を交互にかざして、あっちのグレープフルーツ畑や桃畑、ブルー

ン、洋梨、レモン、一区画ずつをぱちん、ぱちん、と消していき、最後に両の手で自分の目を覆いました。真っ暗になった視界の中で、王様の心には言い難い愛が満ちてきて、満ちてきて、

「わしは、そのときを待っているのかもしれないね」
目を覆った姿のまま、王様はぼろぼろと涙を落としました。

泣いています。

まだ泣いています。

室内に戻りました。

十五時 おやつ

ああ美しき 樹上のきみら
身のうちに 力あつめ
香気もて 地上を賑わす
かくのごとき 不思議の夢
目覚めたらわしもまた
陽射し浴び 枝たわませる
一個の果実なのかもしれないね (独唱)

これが、ある日ある人のキーボード打つ指がすべて生まれた小さな王様、自意識
果樹王。

ほら、王様が、バルコニーから手を振っています！

それではみなさん、
ごきげーんーよー！ (合唱)

なぜ我々は有用性を測られる存在なのか？

— 軍事革命・資本主義・ヨーロッパの病 —

井上智洋

(経済学者)

1

何年も前のことだが、女性向けフ
ァッション雑誌『アンアン』を読み
ながら、バタイユのいう「有用性」
について考えを巡らせたことがある。
バタイユによれば、資本主義に覆わ
れたこの世界に生きる人々は、有用
性にとりつかれている。つまり、役
に立つものばかりを重宝し過ぎるの
である。

役に立つが故に価値あるものは、
役に立たなくなった時点で価値を失
うので、その価値は独立的ではない。
紙幣は財が買えるから価値を持つ
てであり、そうでなければただの紙切
れとなる。紙幣は購買の手段であり、
その価値は購買に隷従しているの
である。

バタイユが「至高性」と呼ぶ真の



価値は、役に立つと否とに関わらず
価値があるもの、例えば一杯のワイ
ンがもたらす「奇蹟的な感覚」や「春
の朝、貧相な街の通りの光景を不思
議に一変させる太陽の燦然たる輝
き」にある。

それにも関わらず、近代以降の人
々は有用性に固執するあまり、あら
ゆるものを手段化し、隷従的地位に
貶めている。ポリフェノールは体
に良いなどと言って、至高性をもた
す可能性のある赤ワインを未来の
健康のための手段へと変えてしま
う。「こうした人間は詩を知らないし、
榮譽を知らない。こうした人間から
みると太陽は、カロリー源にすぎな
い」。

さらには、人間に対してですら有
用性の観点でしか眺めなくなり、人
間はすべからず社会の役に立つべき
だなどという偏狭な考えにとりつか
れる。失業は、人々に対し収入が途
絶えるという以上の打撃を与える。
つまり人としての尊厳を奪うのであ
るが、それは我々が自らについてそ
の有用性にしか尊厳を見い出せない
哀れな近代人であることを表してい
る。なぜ、自分自身を社会へと従属

せしめるのだろうか。「天の無数の
星々は仕事などしない。利用に従属
するようなことなど、なにもしな
い」。

人間は有用であるが故に生きてい
る価値があるのか。それとも、人間
の生そのものに価値があるのか。バ
タイユ風に考えれば、人間の集合で
あるところの人類は全く不要であ
る。今この瞬間、全人類が減んでも
誰も困らない。なぜなら、その瞬間
に困り得る存在である人間は一切い
なくなるのだから。私自身にとって
私が必要なのと同様に、人類自身
にとつて人類は全く必要ない。

それでは、宇宙にとつて人類は有
用だろうか？ 残念ながら、人類は
宇宙に何の貢献もしていないし、宇
宙は人類に何の関心もない。人類の
滅亡に際して、「天の無数の星々」
はひとしずくの涙も流さないだろう。
以上の簡単な考察は、一つの論理
的帰結を導く。すなわち、人間の価
値は究極的なところ有用性にはない。
もし、人間に価値があるとするとす
らば、人間の生それ自体に価値があ
ると言う他ない。したがって、今時の
アニメの主人公のように「僕は、要
らない人間なんだ」などと嘆くのは
筋違いである。人類全体が不必要な
のだから、一人の人間の要、不要な
ど論じても大した意味はない。必要
か否かに関わらず、全ての人間の生
に価値がある。

自分が必要とされているか否かで

悩むのは、近代人特有の病である。
そんな悩みを抱えた古代ギリシャ人
がどれだけのいただろうか。それは、
近代化がもたらした途方もない価値
転倒の産物である。しかしながら、
我々の社会では、かかる転倒が訝し
がられることがなく、あまつさえそ
の転倒、人間の有用性に価値を置く
というその転倒がさらに推し進めら
れる傾向にすらある。

推進の原動力は数量的な評価であ
る。現代では至るところで人間の能
力、態度、成果物などに点数がつけ
られる。とりわけおぞましいのが主
観的にしか判断し得ないものの点数
化であり、例えばそれは大学の教員
として私自身が手を染めている学生
の授業態度やレポートに基づく成績
評価であり、小学校の通知表で子供
達の学力ばかりでなく性格に対して
も未だに下される三段階や五段階の
評価である。極端に言えばこういう
ことになる。

「行為はすべてにわたって良い評点
と悪い評点、良い点数と悪い点数の
領域へ振りわけられる。次に「評点
の」数量化、および計数による経済
策を定めることが可能である。たえ
ず公表される、刑罰の一種の会計状
態のおかげで、それぞれの者にかん
する処罰の収支計算を入手できるわ
けである。」(Foucault 1975)⁴

今や学校や企業ばかりでなくネッ

ト空間にまで数量的評価の営みは広がっており、Amazon で書籍が、食べログでレストランがそれぞれ星の数によって評価され、twitter のフォロワーの数や facebook の友達の数を一種の評価と見なして競い合う者もいる。

小説は発行部数によって測られ、絵画はオークションによって値が付けられる。「現代では文字も見世物も、貨幣の計算に還元できるものである」⁽⁵⁾。あらゆる芸術の価値が数量化される中で、詩は比較的逃れられている。しかし、それは詩が力を失うことを意味している。現代社会のダイナミズムの源泉は数量化にあるからだ。

人間の有用性もまた数量的に評価されることで、その重要性が決定的に高められる。我々の社会では、人間の有用性は賃金という形で明確に数量化されている。あるいは、有用性は賃金に反映されるべきだと考えられている。それが証拠に、全く役に立っていない人間が高給取りだった場合に、人々はそれを不公正だと考えるはずである。

したがって、これからますます、企業やその他の組織で、人間の有用性を正確に測定し、賃金に反映させようとする試みが成されていくだろう。それは、公正であらねばならないという如何にも好ましい意志に基づいていたとしても、この社会を息苦しいものにせずにはおかない。精

神的ストレスの多くは、人々が評価に晒されることから発生する。公正さのために評価を厳密にすればするほど、我々の神経はそれだけ磨り減っていく。地獄への道は善意で舗装されている。

2

それにしても、一体どうしてこんなことになってしまったのか。そもその始まりは、宋朝の中国で発明された銃や大砲などの火器がモンゴル帝国を通じて十四世紀のヨーロッパに伝播したことにある。それから後の十六世紀の軍事革命によりヨーロッパの軍隊は様変わりし、槍を携えた少数の重装騎兵に代わって、マスケット銃を持った多人数の横列歩兵がその主力となった。

音楽で即興的要素を減らすのと同様に兵士の戦場での行動もパターンを定められ、行進の仕方や頭の向け方があらかじめ訓練されるようになった。「発射、回れ右、弾薬込め、位置移動を、兵隊たちに徹底的にたたきこまねばならない」。ラ・マンチャの郷士が憧れた騎士道は黄昏の時を迎え、兵士はただのコマとなり数量的な存在となった。封建騎士は無規律に近かったが、十七世紀には規律訓練を受けた兵士をツリー状に編成した軍隊が現れた。そのプロトタイプが、歩兵と砲兵、騎兵を統合的かつ階層的に組織したグスタフ・アドルフ率いるスウェーデン軍であ

る。

大砲は当初戦場においてその轟音が敵方への脅しになるという程度の役割しか果たさなかったが、一四五三年にオスマン・トルコのウルバン砲がコンスタンティノープルの堅固な城壁を破砕し、さらに一四九四年にシャルル八世が率いた四十門以上の攻城砲がイタリアの城塞を一日で陥落させ、その有効性は誰の目にも明らかになった。

砲撃に耐え得る新しいタイプの要塞（イタリア式築城術に基づいた要塞）の建築、火器の大量生産、多人数の兵士のための兵站など、戦争には莫大な金が掛かるようになった。軍事革命以降の君主が他国を首尾良く征服するためには、勇猛果敢な兵士よりも、軍隊の編成と維持に費やされる金が不可欠だったのである。

また、弾道計算や兵士の編成に数学が必要となり、「十六世紀の軍事教本には、平方と平方根の表が載っているのが通例だった」⁽⁶⁾のである。数学は歴史的に、中国、インド、イスラム圏などの各地域でも断続的に発達したが、軍事上の必要ゆえに近世のヨーロッパでは急速かつ持続的に発達させられ、世界は徹底して数量化されて把握されるようになった。

こうして戦争の勝敗を決するのは、騎兵の勇猛さではなく経済力と科学技術力となり、ヨーロッパ各国の主権者は、軍事力を支える経済力の増

ナポリに入るフランス軍兵士と大砲



強のために重商主義政策を採用するとともに、科学技術を振興した。他方で、例えばイングランドでは「救貧」の名の下に、怠け者に鞭打ちの刑を加えたり、貧民を矯正院に収容し強制労働をさせたりして国民を盛んに労働へと駆り立てた。現在では、鞭打ちこそ加えられないが、労働へと駆り立てる無言の圧力があるという意味では同じことである。

人間の身体は戦争のための道具となるとともに、生産のための道具となった。戦後の日本では前者の道具化は否定されているが、後者についてはそうではない。失業によって失われる尊厳は、そのような道具化の産物である。

経済力と科学技術力の絶え間無い

発展は十八、十九世紀に産業革命を発生させるに至り、イングランドを始めとする西ヨーロッパ諸国は、「労働と土地によって農作物を生産する経済」から「労働と資本を投入することによって工業製品を生産する経済」すなわち資本主義（近代資本主義、産業資本主義）へと移行した。

つまるところ、ヨーロッパの戦争が資本主義を生み出したのである。⁹⁾ 経済発展は、とりわけ第二次大戦後には人々の生活の向上のために促進されたが、重商主義の時代にはそうではなく他国を併呑し蹂躪するために目指された。マックス・ウェーバーは、プロテスタンティズムの禁欲主義が資本主義を生み出し、後にはそのような禁欲主義の支えなしに資本主義が自立して営まれるようになったと述べたが、むしろこう言うべきであろう。戦争が資本主義を生み出したが、後には戦争なしでも資本主義の営みが続けられるようになった。

資本主義は一般的には、生産物の全てを消費せずにその一部を投資に回して、資本を増大させることによって拡大再生産を行うような経済として考えられる。より大きな投資は後により大きな利得を生むことから、資本主義は未来のために現在を犠牲にするような心的傾向をもたらし、あらゆる物事を未来の利得のための有用な投資と見なす考えを蔓延らせる。

経済学では、「資本」は通常、工場や機械などの生産設備を意味するが、しばしば人間の持つ知識や技能も生産の際に投入される資本として扱われる。後者については、特に「人的資本」と呼ばれ、教育は人的資本に対する投資と見なされる。（なんだって、経済学者は人の神経を逆なでする概念ばかりこしらえるのだからか！）その観点からすれば、小学校に上がってから引退するまでの人生は、投資期間とその回収期間ということになる。受験勉強のための塾通いは多くの場合まさにこの観点から成されている。子供の時間は未来の富のために捧げられているのである。

資本主義の発達に伴って、学術は真実を探索するもの、あるいは人間を自由にするものとしての価値を失ってきた。「知識は、それ自身だけで善いものと見られず、また一般的にいつて、ひろくて情味豊かな人生観を生み出す方法としては考えられず、単なる技術の一要素とみなすようになって来ている」¹⁰⁾のである。さらには、将来の富を生む手段としての価値が強調され、そのような価値を持たない学術分野は存亡が危うくなっている。学術的研究が投資物件のように扱われているのが現状である。

その挙句の、女性向けファッション雑誌における「セックスできれいになる」特集の出現である。至高性

の典型であるところのエロティシズムすらも、美しくなるための有用な投資と見なされてしまっている。そう思っただけは現代人の抜け目なさに哀れを催したのだった。

それもこれも全てはヨーロッパ人が戦争に明け暮れていたせいだ。日本でも戦国時代の末期に軍事革命が起き、我が国はヨーロッパ以上の銃の生産国となった。続く安土桃山時代は、日本が歴史上軍事的に世界最強だった可能性のある唯一の時代である。だが、江戸時代に軍縮が成され、軍事革命の成果は捨て去られた。¹¹⁾ 清朝の中国においても同様である。東アジアではイノベーションや経済発展よりも、安定と秩序が好まれた。

対するヨーロッパでは、その大地がアルプスとピレネーの山脈、ドーバー海峡、アルデンヌの森などの自然の障害物で区切られているため、全地域を支配するような帝国が現れず、小国が乱立し覇権を争う時代が果てしなく続いた。¹²⁾ ヨーロッパ地域における完全な平和は、十六世紀では十年、十七世紀では四年、十八世紀では十六年である。¹³⁾

3

こうした覇権争いの中でヨーロッパ特有の病が発生した。それは（1）飽くことない成長と征服への欲望（成長パラノイア）¹⁴⁾、（2）社会的ダーウィニズム、（3）ツリー状の認

識と組織構成、（4）人間の評価を含む万物の数量化、（5）人間を含む万物の手段化、等々である。

十六世紀以降、これらのヨーロッパの風土病が、主権国家体制と近代世界システムの広がりとともに世界に蔓延し、我が国はライフル砲を装備した黒船の来航を契機にそのような政治体制と経済システムへの包摂を余儀なくされた。それゆえ、現在我々の周りに当たり前のように存在する幾つかの欲望や認識は、ユーラシア大陸の西の端のヨーロッパで発生し、東の端の日本に伝播して蔓延した病に過ぎないのである。

このような病に対抗する運動は、近代を通じて常に展開されてきた。いわゆる右翼や左翼は「政治的」には主権国家体制に、「経済的」には近代世界システム（＝資本主義）に抗する運動と位置づけることができる。同時に、それらは主権国家体制と近代世界システムに付随するヨーロッパの病の幾つかに「精神的」に対抗するものでもある。

ごく単純化して言えば、右翼は復古的な、左翼は前進的な、かかる対抗運動である。日本の戦前の右翼はアジア主義とも重なり合っているが、それはヨーロッパの病に抗するという観点から見れば必然的である。あるいはまた、復古的かつ前進的であるような一見矛盾するイデオロギーは革新右翼と呼ばれているが、ここを支配する近代ヨーロッパの精神

的病理からの脱却の方向性として過去と未来があった場合に、その両方を取り込むことは矛盾でもなんでもない。例えば、北一輝の『国体論及び純正社会主義』にそのような両者の接合を見ることが出来る。

革新右翼の運動は戦後には退潮し、左翼の運動も一九九〇年以降力を失ったが、今なお、反グローバリズムや反システム運動、アウトノミア運動といった対抗運動が続いている。それらとは別に、今後活発になると私が予見するのは、「反評価運動」とも言うべきものである。

それはさしあたり、小学校から通知表を放逐したり、大学で成績を付けない科目を増やしたり、企業において無駄な成果主義を排したりといった運動として考えられる。しかし、その最も大きな目標は賃金労働のあり方の変革にある。そうはいっても、昔ながらの硬直した社会主義思想はほとんど頼りにならないので注意が必要である。ソ連型社会主義の失敗は、近代世界システム（＝資本主義）に抗する役割を主権国家に担わせた点にある。つまり、国家による計画的な経済運営ということであるが、これは国家官僚が資本家にとって代わっただけの話である。民間企業であれ、国営企業であれ、そこで賃金労働をしていることには変わらない。

恐らく、賃金労働を廃絶することは不可能だろう。しかし、その時間

を短くすることはできる。パリで、バタイユが「普遍経済学」の着想を膨らませているのと同時期に、ドーバー海峡の向こう側では、ケインズが経済学の「一般理論」について思案していた。それらは「供給の過剰」と「需要の不足」をそれぞれ強調しており、裏表の関係にある。日本の失われた二十年とは、このようなバタイユ・ケインズの的な経済現象である。その解決のための方法としては、「消費需要や投資需要の拡大」と「労働供給の縮小」の二つがある。

八十年ほど前にケインズは、百年後に人間は一日三時間働けば十分になると予言した。このままではケインズの予言は実現しそうにないが、恐らくベーシックインカム⁽⁵⁾の導入によって、労働時間の劇的な短縮が可能となるだろう。経済学者はそのような経済が持続可能であるか否かを検討すべきである。

かかる経済においては、賃金によって測られる人間の有用性はさほど問題とはならない。なぜなら、賃金労働に費やす時間は、人間の活動時間のほんの一部を占めるに過ぎなくなるからである。そして、残された余暇時間の多くは、未来の利得の獲得のためではなく、現在の時間を楽しむために費やされるだろう。

ケインズは、百年後の未来についてこうも言っている。

「われわれはもう一度手段より目的

を高く評価し、効用よりも善を選ぶことになる。われわれはこの時間、この一日の高潔でじょうずな過ごし方を教示してくれることができる人、物事の中に直接のよろこびを見出すことができる人、汗して働くことも紡ぐこともしない野の百合のような人を、尊敬するようになる。」(Keynes 1932)⁽⁵⁾

ケインズの予言が成就する時、有用性の権威は地に堕ちて、至高性が回復し、詩が蘇るのである。

【註】

- (1) Bataille, J. (1990) *La Souveraineté*, Gallimard. (湯浅博雄他訳『至高性』人文書院、一九九〇年)。
- (2) Bataille, J. (1976) *La Limite*. De L'utile, Gallimard. (中山元訳『呪われた部分 有用性の限界』筑摩書房、二〇〇三年)。
- (3) 前掲書、Bataille (1976)
- (4) Foucault, M. (1975) *Surveiller et punir: naissance de la prison*, Gallimard. (田村俤訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社、一九七七年)。
- (5) 前掲書、Bataille (1976)
- (6) Crosby, A. W. (1997) *The Measure of Reality*, Cambridge University. (小沢千重子訳『数量化革命』紀伊國屋書店、二〇〇三年)。
- (7) Parker, G. (1988) *The Military Revolution: Military Innovation and the Rise of the West, 1500-1800*, Cambridge University. (大久保桂子訳『長篠合戦の世界史——ヨーロッパ軍事革命の衝撃 一五〇〇—一八〇〇年』同文館、一九九五年)。
- (8) 前掲書、Crosby (1997)
- (9) それはもちろん、ゾンバルト以来幾度も繰り返し主張されてきたことである。
- (10) Russell, B. (1935) *In Praise of Idleness*, George Allen & Unwin. (堀秀彦・柿村峻訳『怠惰への讃歌』平凡社、二〇〇九年)。
- (11) Perrin, N. (1979) *Giving up the Gun*, David R. Godine. (川勝平太訳『鉄砲を捨てた日本人——日本史に学ぶ軍縮』中央公論社、一九九一年)。
- (12) Jones, E. L. (1987) *The European Miracle: Environments, Economies and Geopolitics in the History of Europe and Asia 2nd ed.*, Cambridge University. (安元稔・脇村孝平訳『ヨーロッパの奇跡——環境・経済・地政の比較史』名古屋大学出版会、二〇〇〇年)。
- (13) 前掲書、Parker (1988)
- (14) 「成長パラノイア」は、歴史学者川北稔が『イギリス近代史講義』（講談社、二〇一〇）などで用いている概念である。
- (15) ベーシックインカムは、政府が無条件で全ての国民に対して最低限の生活を送るのに必要な所得を給付する社会保障制度である。子供手当で＋大人手当で、つまり「全員手当」と考えれば分かりやすい。
- (16) Keynes, J. M. (1931) *Essays in Persuasion*, Macmillan. (宮崎義一訳『説得論集』東洋経済新報社、一九八一年)。



midnight summer poem collection

2013 年 夏の詩 十一篇
selected by midnight press

じやあ また 川田絢音

人を訪ねると
洗面台の水がたれている
背中をまるくして鉛筆をけずっているところだ
そのままの顔で眠っているのを
想像しても
人への距離がはかれない
わたしたちは紅茶をのんだ
夏はどうするのですか
と聞かれて
わたしは夏のことを考えられなかった
人は
ひとりになりたそうにあたりを見まわした
わたしは階段をおりて
通りを歩いた
じゃあ また
抱きすくめることも
河へ突きおとすこともできない
人が
もうすぐ
誰でもなくなってしまうのでもない



ネロ 谷川俊太郎

——愛された小さな犬に

ネロ
もうじき又夏がやってくる
お前の舌
お前の眼
お前の昼寝姿が
今はっきりと僕の前によみがえる
お前はたった二回程夏を知っただけだった
僕はもう十八回の夏を知っている
そして今僕は自分のや又自分のでないいろいろの夏を思い出している
メゾンラフィットの夏
淀の夏
ウイリアムスバーク橋の夏
オランの夏
そして僕は考える
人間はいつたいもう何回位の夏を知っているのだろうか
ネロ
もうじき又夏がやってくる
しかしそれはお前のいた夏ではない
又別の夏
全く別の夏なのだ
新しい夏がやってくる
そして新しいいろいろのことを僕は知ってゆく
美しいこと みにくいこと 僕を元気づけてくれるようなこと
僕をかなしくするようなこと
そして僕は質問する
いつたい何だろう

いったい何故^{なぜ}だろう
いったいどうするべきなのだろうと

ネロ

お前は死んだ

誰にも知れないようにひとりで遠くへ行って

お前の声

お前の感触

お前の気持までもが

今はっきりと僕の前によりがえる

しかしネロ

もうじき又夏がやってくる

新しい無限に広い夏がやってくる

そして

僕はやっぱり歩いてゆくだろう

新しい夏をむかえ 秋をむかえ 冬をむかえ

春をむかえ 更に新しい夏を期待して

すべての新しいことを知るために

そして

すべての僕の質問に自ら答えるために

夜明け

アルチュール・ランボオ

小林秀雄訳

俺は夏の夜明けを抱いた。

館の前には、まだ何一つ身じろぎするものはなかった。水は死んでいた。其処此処に屯した影は、森の径を離れてはいなかった。俺は歩いた、ほの暖く、水々しい息吹きを目覚ましながら。群なす寶石の眼は開き、鳥たちは、音もなく舞い上がった。

最初、俺に絡んだ出来事は、もう爽やかな蒼白い光の満ちた小径で、一輪の花が、その名を俺に告げた事だった。

俺は、樅の林を透かして髪を振り乱すブロンド色の滝に笑いかけ、銀色の山の頂に女神の姿を認めた。

そこで、俺は面^{かづき}帋を一枚一枚とはいで行った。両手を振って道をぬけ、野原をすぎて、彼女の事を鶏にいいつけてやった。街へ出ると、彼女は、鐘塔や円屋根の間に逃げ込んだ。俺は、大理石の波止場の上を、乞食のように息せき切って、あとを追った。

道を登りつめて、月桂樹の木立の近くまで来た時、とうとう俺は、掻き集めて来た面帋を彼女に纏いつけた。俺は彼女の途轍もなく大きな肉体を、仄^ほかに感じた。夜明けと子供とは、木立の下に落ちた。

目を覚ませ、もう真昼だ。



溪流 中原中也

溪流^{たにがは}で冷やされたビールは、
青春のやうに悲しかった。
峰を仰いで僕は、
泣き入るやうに飲んだ。

ビショビショに濡れて、とれさうになつてゐるレッテルも、
青春のやうに悲しかった。
しかしみんなは、「実にいい」とばかり云つた。
僕も実は、さう云つたのだが。

湿つた苔^{こけ}も泡立つ水も、
日蔭も岩も悲しかった。
やがてみんなは飲む手をやめた。
ビールはまだ、溪流^{たにがは}の中で冷やされてゐた。

水を透かして瓶の肌へをみてゐると、
僕はもう、此の上歩きたいなぞとは思はなかつた。
独り失敬して、宿に行つて、
女中^{おんなさん}と話をした。

八月の石にすがりて 伊東静雄

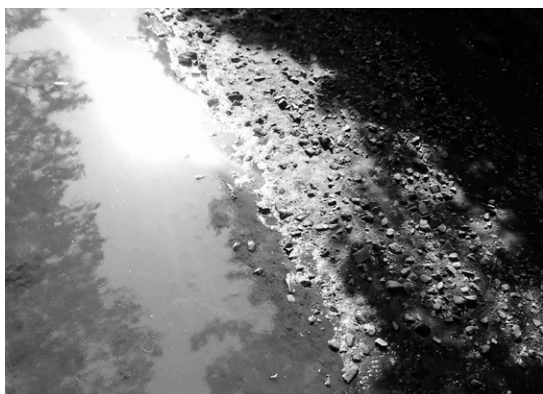
八月の石にすがりて
さち多き蝶^{さだめ}ぞ、いま、息たゆる。
わが運命^{さだめ}を知りしち、

たれかよくこの烈しき
夏の陽光のなかに生きむ。

運命^{さだめ}? さなり、
あゝわれら自ら^{みずか}孤寂^{こせき}なる発光体なり!
白き外部世界なり。

見よや、太陽はかしこに
わづかにおのれがためにこそ
深く、美しき木蔭をつくれ。
われも亦、

雪原^{せつげん}に倒れふし、飢ゑにかげりて
青みし狼の目を、
しばし夢みむ。



夏の歌 蒲原有明

薄くもる夏の日は
愛欲の念にうるみ
底もゆるをみな眼ざし、
むかひゐてころぞ悩む。

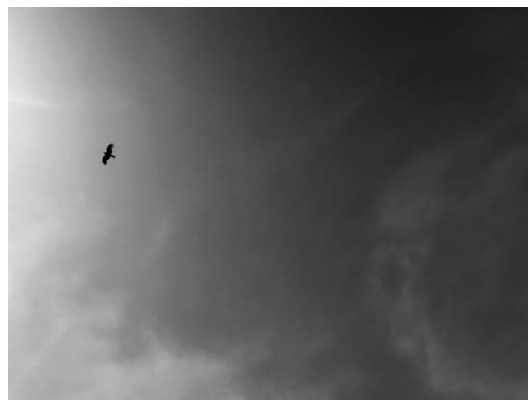
何事の起るともなく、
何ものかひそめるけはひ、
執ふかきからは、やをら、
重き世をまろがし移す。

窓の外につづく草土手
きりぎりす気まぐれに鳴き、
それも今はたと聲絶え、
薄くもる日は蒸し淀む。

ややありて茅が根を疾く
青蜥蜴走りすがへば、
ほろほろに乾ける土は
ひとしきり崖をすべりぬ。

なまぐさきにほひは、池の
上ぬるむ面よりわたり、
山柩の花は墜ちたり、――
朽ちてゆく「時」のなきがら。

何事の起るともなく、
何ものかひそめるけはひ、
眼のあたり融けてこそゆけ
夏の雲、――空は汗ばむ。



八月の元氣 清水哲男

海水浴場で考えることは
あまりない
ただこれだけたくさんの人たちが
やがては
それぞれの家というところに帰り
やがては
それぞれの家というところから
ここにいる人たちの数と
きつちり同じ数の死体となって
出ていくのだと思う
そう思うと
安心する
安心して

裸の人たちを見ることが出来る
安心して
元気に海の虫を殺すことができる
元気に元気に
人は海というところで
死に慣れていくのである



南へ 松浦寿輝

水はしたたりおわった
稲光は遠ざかった
夏の旋律は絶えた
鶏が数羽くびり殺され
蒼ざめた血が舗石のうえに撒き散らされた

汚れた魂となつてわたしは歩いた
極北の島の海辺で

陰気に賑わう夕暮の市

払下げの軍服を着た薬売りが声を張り上げ

片耳の潰れた人相見は横目でわたしを睨む

空地ではてづま使いや軽業師がわずかな見物人を騙そうと

みすばらしい芸を披露している

はしゃいで走り回る子供たちの姿もなく

恋人たちの笑い声も聞こえない

ただ鈍い海鳴りに怯える貧しい老人たちが

けわしい顔で右往左往しているだけ

調子っぱずれの音楽となつてわたしは歩いた

どこまでつんのめるように歩いても月は昇らず

詩はわたしに訪れない

こんなところまで

来てしまったな

甘美な孤独はもううんざりだ

狂言綺語の花火の恍惚にももう飽きた

それより風のなかに吹きちぎられてゆく

ことばのかけらのかすかな軋みに耳を澄ましていたい

南へ行こう

温かな夕立がいきなり降りだしてはすべてをぐっしり濡らし

腐りかけたくだものの醗酵する甘い馥りがいたるところにたちこめる

通りすがりの美しい女たちは欲望の光にきらめく瞳で

わたしをまっすぐに見つめてくる

そんな南の島の浮き立つような街へ……

極地の村の路地はいよいよ狭く暗くなつてゆく一方で

もう行き過ぎる人もいない

水はしたたりおわり

稲光は遠ざかつて
もう後戻りする道もない

真鶴 山本かずこ

海に向かつて、座っているふたり。これはわたしとあなただ。こんなふうに穏やかに海を眺めたことがなかった。いつも勝手に心が出かけていくので、すぐそばの人をどこかうんと遠くへ置いてきぼりにしていた。

けれど、心は今日、ここに在る。あなたと海を見ている。海にきても、かつては海を見なかった。わたしはひとりで遠く山の向こうへと、昨日出会ったばかりの行きずりの人とドライブに行ったまま帰ってこようとしなかった、こともあった。

かつてはすぐに、人を求めることができた。わたしのまわりで、人は次から次へと行き過ぎた。もう何年も男と愛しあっていたいわ、という人の話を聞いて、ゼロも二十人も三十人も大して違いはないと思うの。そんなことを言ったりもした。(それは、本当にそう思ったから。今もそう思うけれど)

しかし、今日行き過ぎる人もいない。あんなにたくさん歩いていた人々はいったいどこへ行ってしまったのか。わたしは、後ろ姿や横顔に欲情する能力をどこかへ捨ててきてしまったのだろうか。ある日、目がさめると、すべてが消えてしまっていたのだ。

幸福が耐えられなかった、ときもあった。幸福のあまり、一日中、部屋のなかを歩き回った。煙草をひっきりなしに吸い続けた。それは、何年もの間規則正しくつづいた。鼓動のようにときどき不整脈に陥ったりはしなかった。

目に映るものを教えてください。あなたに言われて、我にかえる。目の前を走馬燈のように、次から次へと消えていく日々の詳細、それらを告げる代わりに空を見るだろう。

回り続ける走馬燈の、舞台を空に移したことをあなたは知らない。知らないまま、あなたも空を仰ぐだろう。

まっさおな夏、けれども、未知の季節から届けられる遙かな海鳴りをこの日、真鶴で聞いた、ような気がした。ざわめきながら、一点、澄んでいる。



燈台へ行く道 西脇順三郎

まだ夏が終らない

燈台へ行く道

岩の上に椎の木の黒ずんだ枝や

いろいろの人間や

小鳥の国を考えたり

「海の老人」が人の肩車にのつて

木の実の酒を飲んでいる話や
キリストの伝記を書いたルナンという学者が
少年の時みた「麻たたき」の話など
いろいろな人間がいつたことを

考えながら歩いた

やぶの中を「たしかにあるにちがいない」と思つて
のぞいてみると

あの毒々しいつゆくさの青い色もまだあつた

あかのまんまの力も弱つていた

岩山をつきぬけたトンネルの道へはいる前

「とべら」という木が枝を崖からたらしめていたのを

実のついた小枝の先を折つて

そのみどり色の梅のような固い実を割つてみた

ペルシャのじゆうたんのように赤い

種子^{たね}がたくさん、心の^{しん}ところにひそんでいた

暗いところに幸福に住んでいた

かわい、生命をおどろかしたことは

たいへん気の毒に思つた

そんなさびしい自然の秘密をあばくものでない

その暗いところにもいつまでも

かくれていたかつたのだらう

人間や岩や植物のことを考えながら

また燈台への道を歩きだした

夏の終わりに 久谷 雉

スプーンのさきつぼの

大きなふくらみに映った

じぶんの顔をもてあましているうちに

夏休みのさいごの日は

とつぷりと暮れていった。

消したばかりのテレビに残っているのと

そっくりおんなじあたたかさを

お腹の底に溜めたまま

ほくはゆらゆらと立ちあがる。

妹がテーブルの下に散らかした

千代紙のきれはしを踏んであるくと

旅先で起こしためまいの感触が

ふんわりとよみがえってくる。

濡れぞうきんのように

おもたくなつた頭をかかえて

もういちどだけ

古いたたみに身を横たえる。

じぶんの為すべき仕事のひとつ

この世界から

引き算されたあのようなしずけさが

からだのなかいっぱいに満たされてゆく。

ボクハキット

コノ夏休ミノアイダニ三十年ホド

トシヲトツテシマッタニチガイナイ。

片羽根のない蜜蜂のむくろに

汗でふやけた指先をそつとあてがいながら

ほくはつぶやいてみる。

網戸をふるわす蟬しぐれが

ふいに激しさを増す。

ふたたび夏の入り口へ

ほくをつれさつてゆこうとするように



鷺巣繁男の詩

—手放さなかつた軍隊手帳—

渡辺はじめ

鷺巣繁男（一九一五—八二）の詩を前にすると、詩とはなにか、詩作とはなにかと、あからさまに問うには気が引けることを、それでも端から問うことになる。端からとは、「外形的」ということであるが、「見た眼で」と言い換えた方が良いかもしれない。見るからに敬遠したくなってしまうからである。恐ろしく長く、かつ難しく作られているのである。読むために必要な知識と言ったら、西洋の古典やキリスト教一般とりわけ正教の内奥に及び、原始キリスト教や異端の教義世界に広がる。古代オリエントにも潜入する。原語も引く。でも普通の人は、筆者も含めてそんな本格的な「知」には通じていない。詩人にも分かっている。自分が何を作っているのかを、難解で理解されないかもしれないことを、術学的だと誇られかねないことをも。

しかし、これも事前に「レクチャー」さえあれば、永遠に敬遠されかねない事態も一変するはずである。頭から敬遠されることはなくなる。読まれるべき対象に繰り入れられるかもしれない。時にはアンチ・テーゼを突き付けられた思いで読まれるか

もしれない。とは言え今度は、散文的な事前説明を必要とする詩が、はたして詩と言えるのかと疑われてしまう。詩として自立していないことを暗に自己表明しているようなものだと解られてしまう。それでは「レクチャー」もなにもあったものではない。実は、鷺巣繁男の詩の長さや難解さとは、その点でもアンチ・テーゼ的なのである。

なぜなら、普通、詩に事前解説が不要なのは、突き詰めると、実は不要なものではなく、暗黙の了解事項が介在していて、暗黙の了解事項として事前説明されていたにすぎなかったからである。例示すれば、誰もが詩を書けても誰もが詩人になれるわけではない、その原理的構造でもある。暗黙の了解事項が、誰にでも詩を書かせ、同じ了解事項によって今度は詩人にさせないのである。

鷺巣繁男は、この「暗黙の了解事項」を容れようとしなかったのである。資質的に超えられないことを知っていたからかもしれないが、それ以上に、超えることに意味を見出せなかったからである。だからと言え、既存の詩作品を否定していたわけ

はない。学ぶべきは学んでいた。ただ自身としては、「既存」には拠れなかったのである。時代的体験故である。詩人を「既存」の外に追い遣る内圧であった。

しかし、それが戦争体験だと告げられた時、どのように受け止められるのであろうか。足を拘われた思いになるかもしれない。如何に悲惨な体験であつても、個人体験であるよりは、集団的体験であるからである。一度や二度ならともかく毎度となると詩的契機として軽く見られてしまう。実はその点こそ問題だった。決定的な岐路でもあった。対極に立つのは文学（小説）だった。戦後の戦争文学だった。書かれることが内済だったからである。散文のもつ意味的完結性は、戦争体験をも例外視しない。文学的体験に読み変えてしまふのであった。終に体験以上の実績（文学的実績）となる。

その一方で、終に戦争体験が永遠になった体験者がいた。テーマを超えたテーマだった。「永遠になった」の度合いである。それが言葉を受け付けなかった。言葉があることは、かえって空しさを深めた。今なら、他者でしかないにしても、空虚感に思いを致すことができる。3・11の後、人々は言葉を喪ったからである。喪失を分かち合ったのである。言葉が回復されるには、言葉を超えたもので癒えるのを待つしかなかった。しかも治癒自体を贖罪感としていた。

戦争体験は、さらに治癒を直接的な罪とした。詩人により性急に選択された渡道（戦後直後に敢行された原始林への開拓入植）により、戦争体験は、内的体験に純化され血肉化していった。宗教（正教）と重層化した。結果として戦争文学とは違う語法へと詩人を駆り立てて行つた。過去形も完了形も内側に知らない言葉——言葉を超えた言葉との対峙だった。行き着いたところは、古代の時空間だった。さらなる叙事詩への潜行だった。時制に超然たることは、贖罪感の裏返しでもあった。五十代を迎えた詩人による、より自覚的に見出された詩の意味付けだった。名付けて「ダニール・ワシリースキーの書・第壱」とした『夜の果への旅』（一九六六年）の詩的空間だった。

それ以前、三十四歳時の詩作開始から辿れば、叙事詩の生成過程を詩論的に再考することもできる。逆に最終詩集（一九八一年）まで一望すれば、日本近現代詩に奇観の詩書の架構を見ることができ（大岡信用辞）。しかし、奇観とするのも「外形」でしかない。詩人は、終生、傍らから軍隊手帳（体験日誌）を手放さなかつたからである。「私は何者でなかった。私は死者によって生きてゐた」（『覚書』上掲詩集）という詩人の、死者たちとの交感手帳であった。詩集は、したがって、「死」を今に生き直す戦後の『軍隊手帳』だった。それが鷺巣繁男の詩だった。

詩情と空間〈5〉

浅野言朗

これまでスケールという視点から話を進めて来た。それは、創作をとりまく環境の問題、創作の方法論の問題……等、多岐に渡っており、多義的な視点を内包して論点が混在していた。今回はそれを整理しつつ、特に表現として作られたもの、〈作品〉そのものの現れ方におけるスケールに焦点を当ててみたい。

13…見渡すことを拒否した俯瞰写真
写真集のたたずまいは、どこか詩集の構えに似ている。個人的な内面が、薄い膜の中にかろうじて納められているような形式の揺らめきにおいて。とりわけ写真が客観的な眼差しの例証とは最早誰も思わなくなり、撮影者の内面の投影そのものである

と捉えられる今日においては、そのように思われる。

写真における眼差しはスケールを巡る思考と直結している。建築家でもありデザイナーでもあったイームズ夫妻（チャールズ・イームズ（一九〇七―一九七八）&レイ・イームズ（一九一二―一九八八）の『POWERS OF TEN』（一九八二）は、科学写真集ともいえるべき古典的名著であり自然界におけるスケールを主題としている。一〇倍ずつ或いは一〇分の一ずつ変化して行く視野の中で、素粒子から宇宙までを視覚に納めたあらゆるスケールの写真が並べられている。原子や宇宙のみならず、人や街を俯瞰した視点というのは、決して日常的なものではない。都市の人間を取り巻く景観は、圧倒的に同じ高さの水平な眼差しに曝されている。であるから、スケールの序列を整然と切り取ったという構成以上に、全てのスケールが真上から俯瞰された状態で捉えられている、ということにこの本の特徴がある。ここには、俯瞰することの客観的な強度そのものがあると言える。

さて、あたかも詩集のような二つの写真集を見てみよう。いずれも俯

瞰写真を主題としているが、客観的な視点であるはずの俯瞰的な視線は、極めて個人的なものに感じられる。一方で二つの写真集の印象と方法は対照的である。

『Small Planet』（二〇〇六）に代表される本城直季（一九七八―）の写真は、建築写真としても広告写真としても広く使われ、その発見的な手法によって巷間に知れ渡った。視覚の中心のみにピントを合わせてその周囲をぼかすことによって、現実の景観の俯瞰写真があたかも微細な模倣に見える、という独特の手法によって、強い印象を残す。誰もがカメラを所有する時代では、写真はもはや視点の問題そのものと思われるが、ここではスケールを巡る錯覚が主題となっている。

やはり空撮俯瞰写真を多用する松江泰治（一九六三―）の写真では、全く異なった手法が用いられている。近作『jp205』（二〇一三）では、偶々まで鮮明な空撮写真であるのに、また俯瞰写真であることから広範囲を捉えているにも関わらず、どの写真においても光景の全容を見通すというよりその一部分に視線が押し込められているもどかしさを伴う。それは顕微鏡写真のようにさえ感じられて、模型のスケールをも遙かに遡って都市と自然の景観が微細な結晶構造であるかのように見える。手法は異なっているが、俯瞰という大きいスケールの獲得が反って見る者を微

細なスケールの中に送り込んでいる、このようなスケール感の離脱に時代性が刻印されているだろう。

俯瞰写真とは対照的に、近接した視点による写真の系譜にも触れておこう。『桂離宮』でも名を知られた石元泰博（一九二一―二〇一二）は、それぞれの写真集が特徴的な視点で統一的に編まれた、視点をめぐる手法の写真家であったと思う。主に自然の微細なかたちを近接した視点で捉えた『HANA』（一九八八）や『刻moment』（二〇〇四）、多重露光によるめくるめく色彩と形式の氾濫を捉えた『めぐりあう色とかたちComposition』（二〇〇八）など、眼差しが詩情を纏って迫ってくる。ここでは眼差しは必要なもののみを写している、スケールについての詐称はない。

言葉自体は詩人が発明したものであるが、誰でも使うことが出来る、ということと同じように、写真機はこの百年以上の期間によって誰でもが所有し撮影することの出来るものとなった。素材や道具立ての普遍性と手法の独自性の落差において、詩情は保持されている。

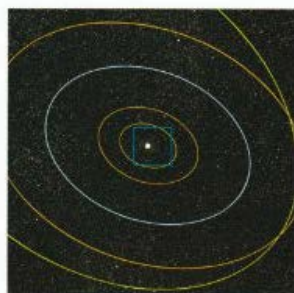
（参考文献…チャールズおよびレイ・イームズ事務所ほか編著村上陽一郎ほか訳『パワーズ オブ テン』日経サイエンス社一九八三、本城直季著『Small Planet』リトルモア二〇〇六、松江泰治著『jp205』青幻舎二〇一三、石元泰博著『めぐりあう色とかたちComposition』

POWERS OF TEN

宇宙・人間・自然界をめぐり大きなスケール

チャールズ・イームズ・レイ・イームズ著 浅野言朗 監訳

刊行年 1982年

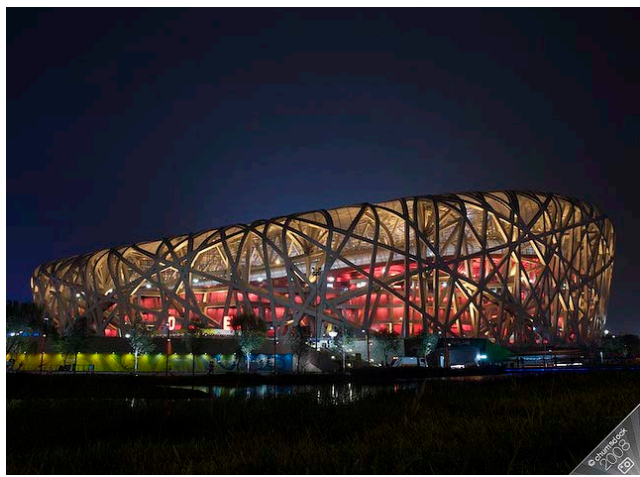


監訳 浅野言朗

平凡社二〇〇八、『石元素博写真展』水戸芸術現代美術センター二〇一〇)

14…粒子性

建築デザインの文脈では、一九九〇年代から顕著になって来た傾向がある。都市の建築では、ファサードと呼ばれる街に向けられた通り側の立面のデザインが、古くはギリシャ・ローマから中世を経てモダニズムの都市にいたるまで重視されている。窓の配置、頂部そして脚部の構成……、時に幾何学を駆使しつつ様々な要素をどのように配列して立面を構成するのか、その結果、都市に対するたずまいを意図的に(美しく/端正に/豪壮に……)獲得するのか、と



'Birds Nest' Herzog & de Meuron

いうことに力点が置かれて、それらは近代建築に至るまで続いた。都市と単体の建築を対峙させつつ、都市の中に重層している様々なスケールの階層を的確に刻印し制御することが、建築のファサードのデザインに求められていたのである。

その様子が変化するのは、二十世紀の終わりからである。「鳥の巣」(二〇〇八)と呼ばれた北京オリンピックのメインスタジアムも手がけたヘルツォーク&ド・ムーン(ともに一九五〇)の建築では、主に立面の構成において全く新しい考え方が展開された。具体的な素材や手法は様々であっても、どれもがスケールの刻印を擦り抜けるように、粒子のように細かい要素の反復において建築の表層を構築していく。それは、「Signal Box」(一九九五)のような初期の作品から、「鳥の巣」までの一つの系譜として一貫している。

その影響は日本にも瞬く間に及ぶことになる。まずは主に都市に面した商業建築の立面デザインの文脈で展開され、さらには複数の中堅から若手建築家において、表層としての立面の構成のみならず、建物自体を粒子の集積のようなものとして構想する(柱や梁といった構造体の上に仕上げとして粒子のような皮膜が被せられている、というのではなく、薄い皮膜自体が構造体そのものでもあるような建築の可能性の追求)、という方向性が継続的に打ち出されてい

る。日本の建築家が海外においても高い評価を受ける理由の一つは、日本人の空間概念が、石庭や茶室のうちに最小限の要素での表現を模索するミニマリズムを基盤としていて、それが日本特有のものとして今日まで受け継がれている、ということにあるだろう。建築を微細な粒子の集積としてデザインする方向性の極点の一つが日本で顕在化しているとしても、不思議はない。

しかしながら、身体から発したスケール感の階層を刻んで行くことを拒絶し、微細な粒子のようなもので環境を覆い尽くそうとする方向性は、電子的な情報の操作と流通・蓄積を基盤とした新しい社会的及び身体的環境の比喩とも一般的に考えられるが、環境への作家性の刻印が困難になっていることの証左でもある。それは、言語をめぐる状況と平行しているとも言えないだろうか。(参考文献:『el croquis 84 Herzog & de Meuron 19931997』el croquis editorial 一九九七、『建築と都市二〇〇二年二月臨時増刊 ヘルツォーク・アンド・ド・ムーン』エー・アンド・ユー)

15…時代における断種と縫合

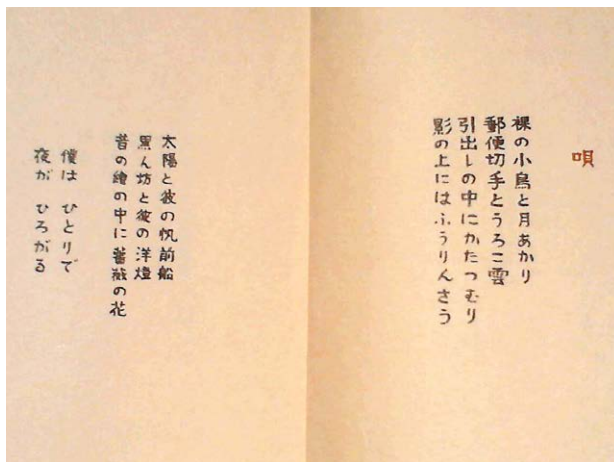
スケールの逸脱や転換を主題とする表現は、言語を巡っても見られるだろう。言葉の階層性を構築し直していく詩の系譜について、第二次世界大戦前後における状況の継続性の観点から、暫く見て行きたい。

一般的に、一つの事件が時代を明確に画して新しい状況を切り拓く、という視点には、疑念を持たざるを得ない。例えば、近代日本政治史の文脈において坂野潤治(一九三七)は、第二次世界大戦の前後を貫いて流れている日本における民主主義と平和の試みの伝統について強調している。(また、民主主義をその時代時代で唱える者は、国内の過去の民主主義者をあえて黙殺し、自己の主張が、国内の伝統に連なるものであるよりも、西洋に範を取ったものであるという姿勢を強調する傾向にある、ということ述べている。)詩においても、戦争は何かを分断したということにより力点をおいて、この前後の時代を考察したい。

詩においては、言語の単位の枠組みを破壊(再構築)して行くことそのものが表現となりうる。言葉の(単位)の再考を(スケール)の問題と捉えるならば、それは詩を巡る形式性への問いと読み替えることも出来るだろう。戦後を知ることのなかった立原道造(一九一四—一九三九)の手法は、両義的な意味を持っている。幾つもの(形式)を試みつつ辿り着いたソネットという形式性は、ひとたび詩としての強度を持つや否や、言葉の一つ一つが文脈の追放を開始して言語の墓場に近い状態へと到達している。『暁と夕の詩』(一九三七)を頂点としつつ、『優しき歌』まで至

るとソネットの一群は時に解体現場のようにさえ思える。それは否定的な意味合いで見られるべきではない。時間が許せば、立原はソネットに代替される形式を見出しただろう。

立原と同様、その形式によって詩句を呼び込んでいる、と感ぜられる北園克衛（一九〇二—一九七八）は、立原がソネットの詩集を編んでいる頃までに幾つもの詩集を纏めている。例えば『白のアルバム』（一九二九）は、様々な形式の詩を集めて豊かで自由なスケッチブックのようであるが、奔放な形式の試みの連鎖は、硬質さの程度に差がありつつも、立原の『さふらん』（一九三二）『日曜日』（一九三三）『散歩詩集』（一九三三）といった初期の試みとどこか呼応しているようにも感じる。



立原道造「唄」（手書き詩集『日曜日』（麥書房復刻版、一九九一）所収）

この両者においては形式と内容の一致と齟齬には時間差があるが、その時間差とは社会情勢との時間差でもあり、それぞれの実年齢との時間差でもあるだろう。立原の詩作品の系譜を形式との兼ね合いにおいて辿ると、設定した形式が詩句を追いつめて食い破ってしまうようであり、詩が詩ではありえない逼迫した領域へと追い込まれて行くように思える。一方、北園の詩は、先鋭的でありつつもどこか行く所まで行くことを避けるように、形式との関係を幸福に結んだまま、やがて量産態勢に入っていく。形式と詩句との間に、余白（遊び）があるのであり、詩句を自由にするための形式と感ぜる。詩と形式を巡る問いかけは、立原と北園において反転されているようである。

前回「12・詩／原寸化」において取り上げた吉岡実の『静物』が出されたのは一九五五年である。ここでは、戦争という壁のあちらとこちらが割り貫かれたようになって、壁が透過性を持った粒子のように透けている。形式と詩の一通りの闘争が終わった跡地から新しい詩業が始められた、というようにも思える。次回はさらに詳しく見て行きたい。

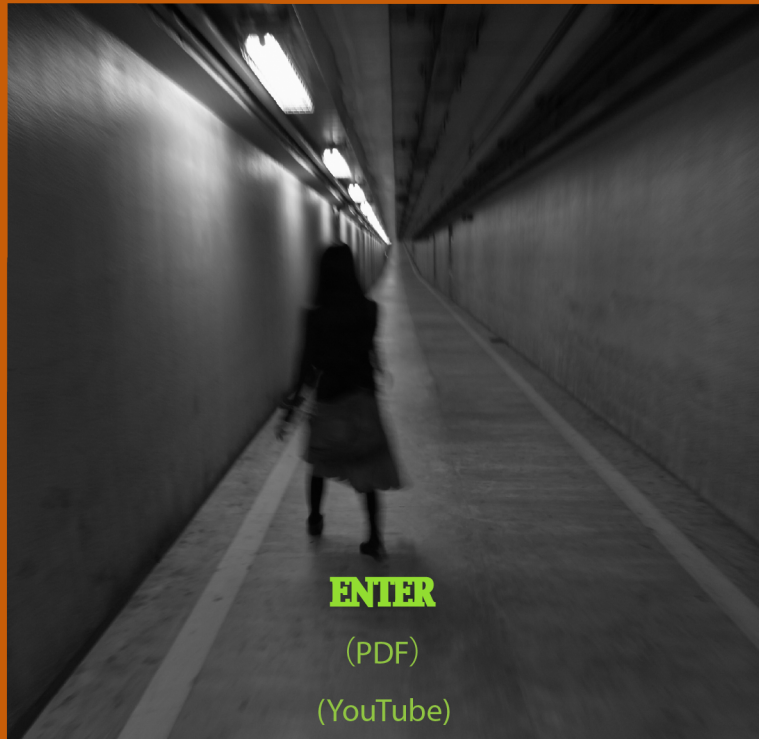
（参考文献）坂野潤治著『日本政治「失敗」の研究』講談社学術文庫二〇一〇、『北園克衛全詩集』沖積舎一九九二、『現代詩文庫105立原道造詩集』思潮社一九八二

そよ風 #4 「詩学」を記憶にとどめつつ

雑誌「詩学」を刊行していた詩学社が廃業の憂き目に遭って、今年で六年が経とうとしている。その直後に伝えられた、社主の寺西幹仁氏の急逝の報の痛ましさをまともただけのものを「特集」と称したり、投稿欄の選者の数を大幅に削減したり、あるいは大して特記性もない詩人団体主催の賞の発表のために少なからぬページ数を提供したりと、誌面のパワーダウンは明らかであったが、何ともやりきれぬ感情が残る結末であった。また、「詩学」を商業誌におけるホームページとして考えていた書き手たちも多かったことだろう。

shigaku.org/）によれば、「詩学」の記録保存や、関係者へのインタビュー記事などの掲載を計画しているという。前者については既に、昭和二十四年、三十年、三十一年の目次の一部がアップされている。「詩学」全冊の目次のデータベース化が完成すれば、手軽に活用できる資料となるに違いない。ぜひともこれからの活動に期待したい。

しかしながら、気になる点もある。国立国会図書館に所蔵されている「詩学」が現在電子データ化中で閲覧不可能なため、角田氏の所蔵するバックナンバー（詩学社に保存されていたもの）を元に目次の記録を作らざるを得ない状況だという。そこで、インターネット上で欠番のデータの提供を呼びかけているのだが、それよりも先に、大学図書館や文学館等の機関をあたってみる方が確実かも知れない。閲覧までの手続きにやや煩雑であろうが、決して不可能な話ではない。足を使って資料を探索することを厭わない人たちのようなので、どうかそのような方法も試みてほしいと思う。また、「詩学」と題された、新作の詩やコラムのコーナーが公式ページには設置されているが、こういう試みはむしろ「詩学」の看板の下ではなく、新たな看板を掲げてやってみたいほうが良い。「詩学」を記憶にとどめつつ、同時に「詩学」から解放されることこそ必要なのではないか。（偏執者）



召集

小林
レント

×

古沢
健太郎

詩／
声

音楽

PDF閲覧不可の場合はYouTubeへ
Adobe Reader最新版による視聴推奨
外部スピーカー・ヘッドフォン出力推奨

■古沢健太郎■
age:25
moya展2010に写真、2012に「実境」発表
Circle Like Qとして活動中
<https://soundcloud.com/circlelikeq>

■小林レント■
age:28
『暗渠』編集係。求職中。
本誌「詩の教室」担当(予定)
著書『いがいが』(ミッドナイトプレス社刊)

「詩の教室」開講のお知らせ

midnight press WEBでは、このたび、次号（第七号）から、「詩の教室」を下記のとおり開講することになりました。

「詩は言葉の一形態であり、それゆえにその本質上対話的なものである以上いつかはどこかの岸辺に——おそらくは心の岸辺に——流れつくという（かならずしもいつも希望にみちてはいない）信念の下に投げこまれる投擲通信のようなものかもしれません。詩は、このような意味でも途中にあるものです——何かをめざしています」（パウル・ツェラン）「ハンザ自由都市ブレーメン文学賞受賞の際の挨拶」から。飯吉光夫訳）

このことばが語られたのは一九五八年ですが、いまや、このことばが含意するものは、その切なるにおいて、安易な思弁を越えていると思わずにはいられません。

詩のかたちが見失われつつあるいま、この「詩の教室」で、ともに考え、詩作を深めていくことができれば幸いです。講師は、小林レントさんにお願ひすることになりました。みなさんのご投稿をお待ちしています。

二〇一三年六月一日

midnight press WEB 岡田幸文

*

「詩の教室」

講師 小林レント

一九八四年生まれ。詩集『いがいが』（ミッドナイト・プレス）。

*投稿規定

・宛先 mpwebclass@gmail.com（テキストファイルまたはワードの形式でお送りください）

・一人三篇以内

・第七号締切り 二〇一三年七月三十一日（以後、発行日の一カ月前を締切りとする）

・すぐれた作品については、midnight press WEBで小詩集を組めます。

「詩の教室」開講の言葉 小林レント



詩は、好機にめぐまれないかぎり、直接的に何かの役に立つものではない。別の日常的条件にさらされたら、役に立つどころか生を痛めるかもしれない。それに生存のテクニクはいまや、散文的であるどころか書類的かもしれない。書類の書き方にはフォーマットがあつて、それは別の書類で指定されている。学校のテストも一種の書類ですね。この場合、教えたり教えられたりはデータ交換のように可能だし、ごまかしがたまで含めた正答が、具体的生活に反映される（追試うけなきゃ、とか、給付金もらいそびれた、とか）けれど、詩はそうはいかないらしい。じゃあ、「教室」ってなんなの、ということになるわけなんです。が、なにもはじまっていけない以上、これに答えを出すのは早計でしょう。廃教室の黒板上にかかげられている、赤茶けた訓示になりかねません。

ただ、どんな破綻のただなかでも、あるいはどんなにささいな日常のメモとしてであれ、詩と、詩を書く人、読む人があるらしいということに気がかかって、ほくもこの教室の入り口に立ちます。言葉である以上は、なにごとかの、そしてなにかへの伝達に差し宛てられた、しかしはつきりとした「目的」や「意味」をもたない営みが、場当たりのな目的や意味に埋めつくされているかに見える現代の内、ともかくつづいている。生存や快適なライフスタイルに役立つように見えることばかりじゃ息苦しくなるのが、人間の動物としての欠陥であり可能性かもしれない。ともかくこの種に生まれついた以上、そういう性質にかかわ

ってゆかなきゃいけないということに先行されている。たとえばイカがイカ墨で模様をつくって一喜一憂していたら、なんて面倒な生物だと思うでしょうが、人間がそれです。生存欲求のレベル以上で一海域のクラゲが戦争を起こしたら間抜けだと思うでしょうが、やっぱり人間がそれです。

ぼくには固定的な「基準」の力が欠如しているけれど、いちいちの詩の言葉にたなびきながら、その流れを示す風見にくらいは立ってみたい。すべての風を集めることは、小さな感受性の風にはもちろん不可能であるにせよ、ひとつの紙面として墜落しないという最低限の持続への配慮とともに、詩文に翻弄される軌跡を描くことは可能かもしれない。それは散文、ちよつと安直に言いかえれば「日常」の世界と詩が、どのように関係するかということであつて、講師の仕事はここに集約されます。教室というと、詩が散文に学ぶふうになつてしまいがちですが、逆の通路もあります。散文は詩に学ばなければなりません。「講師」の師という語を名乗るのは僭越ですが、ともかく詩から学びつつ講じてみる、と。

詩に詩でお返事を書いたり、あるいは書類的に点数をつけたりは、その必要性が自ずから生じないかぎり、この場ではしないということ、そして、よくも人間に過ぎないので、自分の有限なスケープから詩を選んだり裁断しないといけないということは、ご了承いただきたく思います。端的に、さまざまなわたしの、あるいはわたしたちの出来事をくぐりぬけてきた言葉が届き、いくらかの注釈やアドレスが書き込まれ、またそれがどこかへと届けられる、そんな乏しいところからはじめてみようと思います。あとは、はじまつてからのお話ということで、詩を、お待ちしています。



埋め草ポエトリーデイズ 第二回
今日もまた北原白秋を読む

岡田幸文

某月某日

白秋が短歌をつくりだしたのは十五歳の時、詩作を始めたのはその一年後だという。『邪宗門』『思ひ出』『桐の花』『東京景物詩及其他』と読んできてあらためて思うのは、白秋における、詩と短歌とのたえざる「交流」である。それについては、具体的に検証することもできるが、それはいまの主題ではない。思い出されるのは、「歌が白秋の血液であり、動脈であるならば、詩はその感覚形態である」という吉田一穂のことばである。そのとき一穂が考えていたことを知りたい。

白秋の第一歌集『桐の花』が刊行されて百年になると聞き、それが斎藤茂吉の『赤光』と同じ年に刊行されていると知って、その『桐の花』をはじめて通読してみた。冒頭の「春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕」から惹きこまれて読み始めた。茂吉の『赤光』のいくつかの歌を思い出しつつ。だがここで書きたいのは、『桐の花』の歌についてではない。そこに収められた六つの文章、とりわけ「桐の花とカステラ」「昼の思」（あるいは／そ

して「ふさぎの虫」などの文章である。歌集に収められた文章だから、「歌論」として読まれるものなのかもしれないが、僕は「詩論」として読んだ。

「鳴かぬ小鳥のさびしさ……それは私の歌を作るときの唯一無二の気分である。私には鳴いている小鳥のしらべよりもその小鳥をそのかして鳴かしめるまでにいたる周囲のなんとなき空気の捉へがたい色やにほひがなつかしいのだ」（『桐の花とカステラ』 傍点引用者・以下同様）

「少くとも世を楽しむメテリク（かなしみ ミステック）の悲愁と神秘的な蒼い陰影の霧の中に寂しい心の在（あり）所を探す物馴れぬ Stranger の心持、その心を私は慕ふ。」（『昼の思』）

『桐の花』の「翻刻新版あとがき」で、『桐の花』初版刊行時を回顧して、白秋は書いている。「ただ当時の私に於ては、詩作が主であり、歌作が副であつた」、あるいは「私はこの古宝玉（引用者註・短歌のこと）に新様の仏蘭西象徴派の手触を加へようとしたのであつた」と。そのとき白秋は、詩人として、短歌（日本の詩）を書こうとしていたのだと思う。

だが、「桐の花とカステラ」よりも「昼の思」よりも惹かれたのは、巻末に置かれた「ふさぎの虫」という文章である。この「ふさぎの虫」と

いう文章は、とても一言では片づけられないもので、どう云ったらいのか、かんたんにはことばが出てこないのであるが、読む者を惹きつけて放さない不思議な力に満ちている。その冒頭部分を引いてみたい誘惑に駆られる。

「大正元年八月二十六日午後四時過ぎ、俺は今染々とした気持で西洋剃刀の刃を開く。庭には赤い鶏頭が咲いてゐる。細い四角の西洋砥石に油をかけ、ぴつたりと刃を当てる、何とも云へぬ手あたりが軟かな哀傷の亡り続ける。奇異な赤い鶏頭、縁日物ながら血の如な鶏冠の疣々^{いぼいぼ}が怪しい迄日の光を吸ひつけてじつと凝視^{みつ}めてゐる私の瞳を狂気さす。鶏頭^{おまへ}、汝はまるで寂寥と熱意との一揆のやうだ、何時でも汝の集団さへ見ると俺の気分が鬱^{ふさ}ぎ出す。」

この文章が発表されたのは、明治四十五年七月、「姦通罪」で告訴された白秋が市ヶ谷未決監に二週間拘留された後、三浦三崎に転居した大正二年のことであった。これは『桐の花』初版に収録されたが、以後の刊本では、「自ら快しとせぬから」と、削除されている。思い出したように、読み返すことがあるが、そのたびに、そのすくいがたい底なしの感覚に惹きつけられる。以後、文中で幾度となく「鶏頭、鶏頭……」と繰り返されるのだが、それがいつしか「羯諦羯

諦」と聞こえてくるのだった。その三崎滞在時に、かの「城ヶ島の雨」が書かれたと知るとき、白秋の「偉大」に思いをいたす。

雨はふるふる、城ヶ島の磯に、利休鼠の雨がふる。

雨は真珠か、夜明の霧か、それともわたしの忍び泣き。

舟はゆくゆく通り矢のはなを、濡れて帆あげたぬしの舟。

ええ、舟は櫓でやる、櫓は唄でやる。

唄は船頭さんの心意気。

雨はふるふる、日はうす曇る。

舟はゆくゆく、帆がかすむ。

*

今号掲載の midnight summer poem

collection で取り上げた蒲原有明の「夏の歌」について、泣菫の「日ざかり」と比較しながら、白秋は云う。

「同じく『海潮音』の影響を受け、孟夏白日の歌であり、象徴風であり、秀作であつて而もこの感銘の相違は何から来る。有明のこの感覚こそは彼をして初めて近代詩の父たらしめた楔点ではなかったか」

だが、白秋の「感覚」が、有明の「感覚」と同じものであることはできなかった。

角を吹け

わが佳耦よ、いざともに野にいでて歌はまし、水牛^{すゐぎう}の角を吹け。

視よ、すでに美果^{みくだもの}実あからみて

田にはまた足穂^{たりほ}垂れ、風のまに

山鳩^{やまう}のこゑきこゆ、角を吹け。

いざさらば馬鈴薯^{ばれいしょ}の畑を越え

瓜哇^{ジャバ}びとが園に入り、かの岡に

鐘やみて蠟^{ろう}の火の消ゆるまで

無花果^{いちじく}の乳をすすり、ほのぼのと

歌はまし、汝^なが頸^{くび}の角を吹け。

わが佳耦よ、鐘きこゆ、野に下りて

葡萄樹^{ぶどう}の汁滴る邑を過ぎ、

いざさらば、パアテルの黒き袈裟^{けさ}

はや朝の看経^{つとめ}はて、しづしづと

見えがくれ棕櫚^{しゅろ}の葉に消ゆるまで、

無花果^{いちじく}の乳をすすり、ほのぼのと

歌はまし、いざともに角を吹け、

わが佳耦よ、起き来れ、野にいでて

歌はまし、水牛^{すゐぎう}の角を吹け。

この「角を吹け」が書かれたのは明治四十年。「天草雅歌」詩篇の冒頭に置かれた。この「天草雅歌」については、白秋のことばを引くしかない。「四十年の夏、新詩社同人の寛、万里、勇、正雄、白秋は九州旅行の途次長崎に一泊し、天草に渡り、大江村のカトリックの寺院に目の青い神父（パアテル）と語った。

この旅行から何を彼等は齎^{もたら}したか。（中略）中にも北原白秋は「天草雅歌」を、邪宗の「鵠」を、正雄は「黒船」を、また「長崎ぶり」を、その阿蘭陀船の朱の幻想の帆と載せて、ほほういほほういと帰って

来た」（『明治大正詩史概観』）。この時、白秋二十二歳。青春の輝きが感じられる。五五五のリズムは耳に快く、遠く万葉の声を響かせつつ、ギリシャ的世界に遊宴する者たちの歌が生まれた現場に立ち会っているかのようなのである。白秋はここで雅語的〈近代〉をブレイクスルーしている。

五十七歳の生涯で、千二百篇の詩（童謡、歌謡を除く）、八千首の短歌を残した「詩王」北原白秋について、書かれた著作がどれほどあるのか知らないが、白秋の真実を教えてください。決定版というものはあるのだろうか。

白秋の読み方はさまざまであるようだが、白秋の初期詩篇を読み返すとき、その本領は「抒情小曲」にあったと考える。石川啄木の云うとおり、白秋の詩は、歌は、「新しい感覚と情緒」に満ちている。有明になかったものは、この「新しい感覚」であつたか。だが、それだからといって有明の詩を、葛藤を無みし、いいというものではない。白秋から振り返って有明を読み直す。そういう作業があってもいい。



安息 増田晃

水は水晶を削った線に
架る虹のやうに光ることもある。
朝霜をふむ寂しい月のやうに
けはひかすけく花になることもある。

ああ その冷い泡の一つ一つにも
消えいらで 消えているごとき
たましひの安息日がある。

最近、詩を書くことはおろか、詩を読むこともままならない精神的肉体的疲労がつづいていたが、初夏のおとずれにともない、暇があれば車庫に眠っている中古バイクのエンジンをかけ、国道十六号線を南へ、横須賀、三浦、そして葉山まで海岸線走り、鎌倉美術館葉山館脇の小径の先にある人気のない海に行く。そして潮風に当たりながら詩を読む。できれば詩を書こうとノートも広げる。冒頭に挙げた詩は、この一カ月ほど海で読み耽っている詩人の詩である。昭和十六年に刊行された詩集『白鳥』に収められている。正直、私はこの詩集にとっても感動している。実は増田晃の名を初めて知ったのは三年ほど前に買った『近代浪漫派文庫36大東亜戦争詩文集』（新学社、二〇〇六）のなかであった。これは昭和五十一年（一九七六年）、保田與

重郎の序によれば「大東亜戦争終戦三十年を期して」編纂された、有名無名の兵隊の辞世を集めた『大東亜戦争殉難遺詠集』と、戦中の右翼の指導者である三浦一義や影山正治、田中克己ら五名の歌集と詩集の抄録となっている。そのなかに増田晃がいたのである。増田は詩集『白鳥』のみを刊行し出征、昭和十八年に中国で戦死している。二十九歳であった。このように書くと、増田晃はあたかも右翼詩人で、愛国主義的な詩を書いたと思われるが、なんてことはない、そのような作品はほぼ皆無に等しい。むしろ冒頭の「安息」のごとき、無色透明な作品ばかりで、まさに「安息」が「レクイエム」を案じさせる様に、詩集全体は西洋カトリック色が濃い。もう一篇「雪國のクリスマス」を引く。

「娘のマツチが燃えつきたときに
／暖い手は娘の冷えたからだを抱いた
／暖爐の火や七面鳥は消えたけれど
／どちらかはてしもない歎きは
／娘の珊瑚の唇を顫はせてゐた
／かげもないあたたかい手に／娘はやさしいその魂を手渡したのであつた
／

——アンデルセンをよんだ後で——

なぜこのような詩人が、『大東亜戦争詩文集』という益荒男ぶりの書物に収められているのか。確かに増

田という詩人は生前、「ゴギト」「日本浪漫派」へと繋がり、保田與重郎、田中克己ら保守勢力とともに文学活動をしており、詩集『白鳥』以降は、『日本書紀』をもとにした英雄叙事詩『日本新記』なるものも構想し書いていた。さらには恩師にあたる伊福部隆彦の存在も大きい。伊福部は鳥取の、古代から代々つづく宇倍神社の神官の家に生まれた文芸評論家、詩人で、アナキズムとナショナリズムが混在した奇妙な存在である（ちなみに親戚にはあの映画「ゴジラ」の音楽家伊福部昭がいる）。

増田—伊福部—保田といった関係の詳細については、まだ私も端緒にすぎたばかりであるから今後に譲るが、いづれにせよ増田晃という詩人の内部で、西洋キリスト教信仰と古代日本の神話への親和性ともがつけ合いながら、ある純粋な形而上的な「恋心」へと昇華された詩群に、私は感動を催してしまう。

しかし、おそらくこの「純粋性」こそが危険なのである。たとえば詩集『白鳥』の巻末の「覚書」にそれが垣間見える。これは八章からなる短い詩論である。

「四、宗教のない時代は、芸術するものには最も悲惨な時代である。しかしこの悲惨な現代に生まれたればこそ古の尊い時代を知り、芸術家の本質を知り、又私ら青年の目標も自

ら明になる幸が存する。現代に果たして宗教がないか、私らが死にゆく以上有る筈である。しかしその生死にむかふ私たちの悲願と克服と蘇生のみが、また私たちの宗教を自らつくるであらう。かつて聖徳太子御一人のあらはし玉ふた御精神は、また陛下の萬歳を絶叫して仆れてゆく名なき兵士の精神に通ふのである。」

最終四行「かつて聖徳太子御一人……」以降の飛躍が私を立ち止まらせる。なるほど「純粋」な魂を抱えたまま「名なき兵士」として「大東亜」のために戦い「殉死」した詩人は、『大東亜戦争詩文集』に収められるべきだ。このような思考は、今日の戦争を知らない世代に引き継がれたネオ・ナショナリズムの台頭にも直結するだろう。しかし果たして、詩人がここで求めたのは自らの名をこうした「詩文集」で「蘇生」させられることであつたのか。あるいは「英霊」として、詩人が現代では失われたと断じた日本古来の「宗教」に合流して祀られることを願つたのか。私はどれも正しいようにで間違つてもいるように思う。なぜならけつきよくはそうした戦後における一連の右翼的思考は、戦争の狂気を拭い去るための精神的「戦後処理」の一端である感を拭えないからだ。逆に左翼的な戦後民主主義教育を受けた私の世代からすれば、詩人が「覚書」で

書いた精神を、皇民化教育による愚かな「洗脳」＝「マインド・コントロール」の結果であるとして否定したが、これもまた同様に精神的「戦後処理」であり、なおかつ「刷り込み」である以上、その正否は即断はできない（例えば詩集『白鳥』の縮刷版（風書房、一九七五）では、『大東亜戦争詩文集』所収の自爆兵を悼む詩「碑銘三章」など傑作ながら軍国色が残る数篇が削られている）。

問題は、私が増田晃の詩に「感動」し、その「覚書」に違和感を覚えるという「ずれ」である。韻文は聖なる領域で生まれ、散文は世俗的領域で生まれるからだ、と言われればそれまでだが、もう一步手前で、これを詩人のなかの「個」と「集団」の共存による「ずれ」と捉えてみたい。つまり増田の詩はあくまで「個」の絶対領域で書かれ、散文はまさに「私ら」と述べているように「集団」の精神として書かれている、ということである。そしてさらに重要なのは、その「ずれ」が、戦時下だけに特有のものだったのではなく、今も変わらず続いている点である。なぜなら今を生きている私自身が抱えている「個」と「集団」の「ずれ」がある故に、増田の「集団」から逸脱した「個」＝「詩」に感動してしまうからである。では現在では何が「個」で何が「集団」なのか。

これを単純に当時の「軍隊」が現代では「企業」に取って代わっただけ

だと述べるのは易しい。むしろ私が恐ろしいと思うのは「個」／「集団」の「ずれ」に入り込み、その軋みによる痛みを解消し、自他合一してしまう「純粹」なるものの作用である。生きている以上、人間は何らかの「集団」の内部で生きざるを得ない。同時にその縛りから解放された「個」の自由を希求してしまう。なぜだろうか。今さら俗に言われる中二病的な青臭い話をしているようだが、これは詩の発芽を考える上で極めて重要と思われる。というのも、極論ではあるが、子供から大人へと成長する段階で、性の目覚めに伴って認識されるものが、「個」であると私は考えているからである。そして学校という「集団」のなかで禁忌とされ抑えつけられた性欲のはけ口として詩が生まれると考えているからである。しかしその際、性欲は多くの場合「純粹」なる恋へと置換される。朔太郎の「恋に恋する」もそうだが、性欲の「詩化」の段階で、「恋」＝「純粹性」が介入するのである。

美しきあぶらしたたり
金のおぶらしたたりおつるごとく
きみをあらしめたまへ
百合の花つゆに垂れしなひ
ましろの百合匂ひたかきごとく
きみをあらしめたまへ
いろ紅き薔薇雨に濡れ

濡れし薔やはらふめめるごとく
きみをあらしめたまへ

これは「こひびと」という増田の詩の冒頭部であるが、このエロティシズムに満ちた詩語が、どこから溢れてくるかはもはや説明の必要はない。つまり詩の発芽とは、性欲によってどこまでも「集団」から追放されていく忌むべき「個」が、「恋」という「純粹性」の仮面を被ることと「集団」へと逆襲を計るが如きものとも言つて良い。ここでは詩人はもはや特定の個人の「こひびと」に宛てて書いていない。己を追放した全ての「集団」に宛てて書いているのである。

かくして詩人にとって「個」に対立する「集団」は「全世界」へと一気に肥大化する。その過剰さ故に、詩は時を超えて私を感動させる。しかし同時にそれは詩人の破綻を意味してもいる。前回挙げた北一輝や三島由紀夫の「詩」もまた「純粹性」の過剰のテロリズムであらうし、またアナキズムにも私は同じ「純粹性」の過剰を見る。さらには地下鉄サリン事件にみる新興宗教においても同様の過剰を見る。それゆえ若者は惹かれるのであるが、もう私は若くもない。いい歳して海で詩を書いている場合ではないが、私のなかの「ずれ」は未だ消えず、ひたすら米軍機の爆音の下で国道十六号線を妄言を叫びながら走るのみである。

● midnight information

○ midnight press WEB 第二号 (<http://www.midnightpress.co.jp/mokuroku/mpweb-02.pdf>) インタビューをさせていただいたジャズ・ピアニスト中村新史さんのオリジナル1stアルバム「RR」(T-TOC RECORDS、二八〇〇円)が六月二十六日に発売されます。

・) 注文 → <http://www.t-tocrecords.net/>
・「RR」発売記念ライブ。七月八日@JZBrat。詳細 → <http://www.jzbrat.com/liveinfo/2013/07/>
・) 視聴は こちらをクリック → <https://soundcloud.com/t-toc-records/sets/shinji-nakamura-1st-album>



○ midnight press WEB 第四号 (<http://www.midnightpress.co.jp/mpweb-4.pdf>) インタビューをさせていただいた「いりの舎」の三原由起子さんが、第一歌集『ふるさとと赤』(本阿弥書店、一五〇〇円)を刊行されました。

・) 注文 → <http://homepage3.nifty.com/honamisuten/>



○最近の橋下徹大阪市長の一連の発言に関わるさまざまな議論に、ときどき私も巻き込まれることがあるが、そのときはいつも昔から愛読している随筆家、岡部伊都子（一九二三年―二〇〇八年）の言葉を思い出す。

たとえば「生きる こだま」〔岡部伊都子集1〕、岩波書店、一九九六〕では、愛する者と関係を持たないまま戦死した兄、そして自分との関係を持たないまま戦死した婚約者について語られている。岡部は婚約者が出征する前に言った「天皇陛下のためになんか死ぬのは嫌だ。」という言葉に驚き、「わたしなら、よろこんで死ぬけれども。」と返し戦地へ送り出したことを告白する。さらに「慰安所」について、兄と婚約者の仲間の帰還兵が、みな行くのに二人だけは絶対に行かなかったことを知らせてくれて安堵をするが、慰安所に行った兵隊が残した手紙を読み、さらに己を恥じるのである。その手紙には、家族も恋人もみな「名誉の戦死を死ね」と自分に言うが、慰安所の「淪落の慰安婦」だけが「どんなことがあっても死ぬな」と言ってくれる、「自分はもう、愛を口にする女を信じない。」と書かれてあった。

岡部はこのとき、婚約者に返した己の言葉の非情さと、「淪落に突き落とされた女」を「いけにえ」にして自ら「のう」と生きている」ことの傲慢さに驚愕する。そこから「女性戦争の被害者」という偽善のレッテルを完全に取り払い、自らを「加害の女」と称して語りつづけ、

生涯を全うしたことは知られている。

私がここで何を言いたいのかなと言え、この岡部伊都子のような、戦中戦後を生きた女性たちが人生を賭けて真摯に向き合った「戦争」と「性」の繊細極まりない問題を、かくも拘子定規で計ったかのようには語る現代の政治家、メディア、そして私を含めた大衆の不勉強を嘆くのみだ、ということである。これはPoetry Reviewで書いた「性」と「詩」の問題にも繋が、永遠に解決などしない「文学」の問題なのである。「文学」つまり「人間」が分からない政治屋は黙っているがいい。

さて夏のミッドナイトお茶会を七月に開催する予定です。今度はより執筆者と読者をつなげられるような企画にしたいと考えています。後日ホームページに詳細をアップしますので、多くの方にご参加いただけたらと思っています。（中村）
いま、二葉亭四迷を読んでいる。それから村上龍を。どうしてこのようなことになったかといえば、ふとしたきっかけから、村上龍の「すべての男は消耗品である」という一連のエッセイをいくつか読み、『55歳からのハローライフ』という小説を読み終えたとき、どういうわけか、二葉亭四迷を読まなくてはと思った。『浮雲』そして『平凡』を読み、さらに四迷の書いたものを読み継いでいくかと思っているのだけれども、鞆の中には、四迷と一緒に龍の小説も入っている。つまり、四迷と龍とを交互にしばらく読んでみようとしている。だからどうしたと云われれば、それまでなのだが、たぶんいまの

僕は、小説（を通して「男」）について考えてみたいのだろう。

○midnight press WEBも六号(季刊)にして二号目を迎えた。年が明けてから、自分のなかでなにかが動いているのだろうか、ひとつひとつ山を越えていくような気分がする。詩について、midnight press WEBを発行することについて、考えていることもたえず更新されていく。それが、生きるということだろう。

今号では、未来に向けて、新しいプランをスタートさせることにした。ひとつは、「詩の教室」の開講である。これは、かつて「詩の雑誌midnight press」で開講していたもののstarting overである。講師は、かつて「詩の教室」に投稿し、詩集『いがいが』を出版した小林レントさんをお願いすることにした。「詩の教室」の趣旨は二十一ページに書かれているのでお読みいただきたい。読者諸氏の投稿をお待ちしています。

ふたつめは、midnight summer poem collectionの掲載である。詩は、アンソロジーに始まり、アンソロジーに終わると云ったのは、だれであったか。それはともかく、アンソロジーを編むという行為には、詩の本質、その魅力が秘められているように思われる。今回のmidnight summer poem collectionは、ミッドナイト・プレス版「詩のアンソロジー」に向けての第一歩と考えている。長く困難な旅となるだろうが、安易な道をとらずに、腰を据えて進めていきたい。
みつめは、midnight galleryのスター

トである。ウェブマガジンの特性を生かして、表現の新しいかたちを模索する挑戦的な試みのgalleryとしていきたい。第一回は、小林レントさんと古沢健太郎さんのコラボレーションとなった。galleryに出版を希望する方はご連絡ください。ご相談させていただきます。

ミッドナイト・プレスは、midnight press WEBは、これからも未来に向かって肯定的に進んでいきたいと思っています。読者諸氏のさらなるご支援を賜りますようお願い申し上げます。（岡田）

○今号の執筆者

栗原知子 一九七五年生まれ
井上智洋 専門領域はマクロ経済学
渡辺はじめ 一九五〇年生まれ
浅野言朗 一九七二年生まれ
小林レント 一九八四年生まれ
古沢健太郎 一九八八年生まれ

*編集室から

○ミッドナイト・プレスの詩集
祝魂歌 谷川俊太郎編 二七〇〇円
詩の話をしよう 辻征夫 二二〇〇円
ほうふらに掴まって 川田絢音 二二〇〇円
生の泉 中村剛彦 二〇〇〇円

○詩の図書館

ミッドナイト・プレスのホームページ上では「詩の図書館」をオープンしています。現在、伊藤比呂美、井上輝夫、入沢康夫、川崎洋、川田絢音、清水哲男、辻征夫、中江俊夫、倉田良成各氏の初期詩篇を読むことができます。今後も蔵書を増やしていく予定です。

○自費出版のご案内

ミッドナイト・プレスでは、詩集をはじめとして、様々な書籍の自費出版をお引き受けいたします。どうぞ、お気軽にご相談ください。自費出版のご案内をお送りいたします。